

八月 ソ連軍侵攻で陣地撤退・転進

九月 横道河子で武装解除 牡丹江拉古

收容所入り

十月 シベリアへ連行さる 第二收容所

で鉄道建設隊

昭和二十一年一月 第十三收容所に移る 伐採隊

昭和二十二年五月 第十七收容所休息の家入り

七月 第十三收容所に戻り運搬班

十月 第一〇七收容所に移動し各種作業

体験 民主化運動

昭和二十三年六月二十九日

舞鶴上陸 復員し帰郷

昭和二十四年〜四十年

山林労務伐採従事

昭和二十六年 結婚（三男児を授かる）

昭和四十年〜六十年

木材市場で就労

現在は退職年金生活に入っているが、三人の息子が

それぞれ独立し、教師の道を歩んでいる者もあるため、父親がどう闘って生きたか、平和への教材として残したいと記憶を辿って記述された。

（和歌山県 林 三子雄）

シベリア抑留前後の記

鳥取県 森 田 東 明

武装解除

昭和二十年六月月上旬「き号演習」と称して、東満国境小興安嶺一带に遊撃拠点構築のため、機動旅団は出動した。その頃、ソ連との開戦を意識していたのか、それとも極秘の行動であったのか、階級章を外し、将校も普通の兵の服装で臨んだ。遠く人里を離れ、大自然そのものの密林の中に、一個小隊ぐらいが入れる穴を掘り、天井を樹の枝葉で擬装し、そこが起居する拠点であった。七月中は毎日、拠点作業や戦車壕を掘り続け、炎暑の中を過ごした。松花江の凍結時期、ソ連

軍の越境を予想しての作戦と思われた。時に八月五日、図らずも八月十二日から五日間、公主嶺にて旅団管下の将校集合教育（暗号）に参加を命ぜられ、黒管の山中にて大隊長にその旨申告し、急遽陣地を下山した。その頃、小興安嶺の密林深く展開していた陣地の構築状況を視察のため、旅団参謀、連隊長等が吉林から陣地へ赴いておられた。

八月五日老黒山を出発し、牡丹江、凶們で列車を乗り継ぎ、二カ月ぶりに懐かしい吉林へ七日朝帰った。吉林の兵舎には、連隊副官が留守番役であった。平素活気に満ちた兵舎は、き号演習で主力が出動しているため、各中隊とも閑散としていた。

八月九日未明、大きな地震で目を覚ます。突然の空襲であった。私は、中隊の舎前に飛び出した。北方の吉林市街の空が火災で赤い。直ちに非常呼集により兵舎の前後に対空監視を配置された。ソ連機が日ソ不可侵条約を破って日本に宣戦布告し、満州の主要都市を爆撃したのであった。ソ連軍は、戦車部隊を先頭に北満及び東満から侵入し、どんどん南下しているとの情

報であった。全く緊張の一日で、全員軍装のまま仮眠であった。八月十日朝出動命令が発せられ、部隊内は一日中、出動準備のため多忙を極めた。八月十一日、留守部隊（約六〇〇人）の動員は完結し、敦化へ向かって出発した。

八月十二日朝、敦化を通過し、午後二時頃、明月溝駅に到着し下車した。夕刻には公主嶺の二個連隊も到着し、敦化市街を中心に周辺は軍一色であった。敦化市を中心に東方地区から北方の鏡泊湖に向け、約一〇〇キロメートルの範囲に、第一、第二、第三連隊の陣地が構築された。私の中隊は明月溝の前方で、天宝山北側山麓附近の台上に陣地を構築し、延吉方面から進入が予想される敵戦車の攻撃に当たることになった。そして、全員の志気は益々盛んであった。大陸での夏はひとときわ暑く、高粱が背丈より高く茂り、蒸せ返る広野に、夜を徹しタコ壺や壕を掘り、敵の戦車の進撃に備えた。いつでも飛び込みのできるよう、爆雷（十キロ）や手投弾、火炎瓶等を抱き、緊張の数日が続いた。しかし当時の関東軍の戦力では、怪物のよう

な重戦車には、夜、敵陣地内に潜入し奇襲攻撃をする以外に方法はなかった。私は、小隊長としての重責と初出陣の緊張に、闘魂烈々たるものを覚えていた。時に齡二十五歳で、鍛えに鍛えた逞しい体力は、生涯を通じて最も充実していた青春の時代でもあった。

八月十六日、関東軍司令部から「戦争終結により直ちに吉林に撤退すべし」旨の命令を受け、各連隊は陣地を撤退し吉林へ引き揚げることになった。この命令を発した関東軍司令部は、既に新京から南下して通化へ移動していた。全く予想もしない事態であり、我々は日本軍に不利な停戦協定としか考えていなかった。昨日まで張り切っていた将兵達も、雑然と集まっては話し合っているが、何か落ち着かず、不安の色が濃く動揺していた。

八月十八日、部隊は明月溝から吉林へ帰還することになった。しかし、軍馬百数十頭については、出勤時とは状況が異なり貨車の都合がつかず、二百数十キロの行程を行軍で帰ることになった。その指揮官に若い少尉の私が命ぜられた。一週間の携帯糧秣その他必需

品を馬に搭載し、敗戦の色濃く、無気味な教化の市街を後にした。途中、ソ連軍の進入地域を通過せねばならない危険度の高い任務であった。地図と羅針盤を頼りに、野営しながら緊張の毎日であった。途中で敵戦車の轍を発見しては、迂回しながら通った。また、満人の集落を通過する際、「抗日救国」という張り紙が目についた。満人達は、日本惨敗に喝采し、爆竹を鳴らして喜んでおり、我々を見る目が普通でないことに気付いた。今まで日本軍にへつらったあの態度は全くなく、その目は敵意に変わっていた。私は、直感的に情勢の変化を感じ危険と知り、警戒を深めつつ緊張の連日であった。また、天候の悪い日が続き、馬との野営には特別苦勞が多く、神経を使い、目は落ち込み、疲労の極みに達していた。

八月二十四日薄暮、吉林郊外に着いた。既にソ連軍の機動部隊が到着しており、その警戒が厳重で、我が部隊は合流することができなかった。八月二十五日未明、満州電業株式会社の空社宅で、久しぶりに雨露をしのぎ眠りについてしたが、突如として満人の日本人

財産掠奪襲撃に遭遇し、三人の兵が負傷した。命がけの防衛は、まさに映画の乱射乱撃シーンそのものであった。吉林の兵舎に帰ることのできないまま、九月下旬、着の身着のまま、生死の境を彷徨しながら沙河沿飛行場へ辿り着いた。八月下旬からの二週間は、食糧もなく、お互いに相助け、相励ましての行軍であった。沙河沿飛行場には、東滿各地域から残留部隊が続々と集結し、格納庫でしばらく待機することになった。格納庫の壁には、広島、長崎における原子爆弾の投下、日本がポツダム宣言を受諾し、八月十五日聖断は下され、大命により戦闘を停止する旨の大詔が渙発されたことが掲示されていた。夢のような晴天の霹靂の驚きで、しばらく信じられなかった。二、三日は悲憤の涙で何もする元気がなく、自失の状態であった。

九月七日、ソ連軍の戦車、大砲で包囲され、厳しい警戒の飛行場内で、ソ連軍将校と通訳、その後方を昔日の面影もない富永、赤鹿兵団長が随行する中で武装解除が行われた。また、将校、下士官、兵に区分して收容され、完全に軍隊の組織は解体されることになった。

た。十月中旬、帰国するのだとソ連にだまされ、梯団を編成して一週間余りかけ、鏡泊湖、東京城、牡丹江を経て披河に徒歩行軍で移動させられた。そして、ソ連軍監視の下に約二十日間ここに滞在していた。その間、付近の戦場整理や穀物の集荷、積み込み作業に従事させられた。滞在中、逃亡を企て射殺された者もあった。戦場となった牡丹江地域には、軍馬の屍体や、破壊された家屋が多く、あちこちで日本兵の血みどろの死体が発見され、駅の構内では貨車が焼け爛れ、王道楽土の満州は、もう昨日の満州ではなくなっていた。披河の貨物駅で作業中、無蓋車にぎっしり寿司詰めにされた日本人家族の引揚列車を何回か見送った。ほとんどが婦女子で、ハンカチや手を一生懸命振り、何か叫んでいた姿が思い出される。各地で、暴動と虐殺、日章旗は焼き捨てられ、満人達は抗日運動の勝利に沸き返っていた。そして日本人は侵略者扱いにされ、その情勢たるや誠に厳しく、かつ残酷を極めていた。

その頃、ソ側では、日本兵が刃物を隠していない

か、持物検査を行った。初めての検査で、二、三人の将校が所持品の中に、自決用にと隠していた手投弾が発見され、大きな波紋を呼んだ。その将校は、ソ側に連行されたままで帰って来ることはなかった。それからは何回となく、責任者が変わる都度、持ち物検査を行い徹底的に調べられた。不良な監視兵は、時計や万年筆、革製品まで強奪することもあった。陸軍病院の看護婦数人が、断髪にして戦闘帽をかぶり軍服を着て、兵隊の中に混じっていた。丸坊主になった顔には、薄汚く何かを塗っていたようであった。その後、いつしかその姿は見えなくなっていたが、戦友の話では、身体検査で監視兵に見つかり連れ去られたと聞かされ、悲憤に涙したことを思い出す。いつも帰るまではと齒をくいしばり耐えながら、異国の地で敗戦の惨めさを痛感していた。また、ソ連軍の捕虜、特に我々は関東軍直轄の機動部隊であり、なかならずく将校ということを考えると、銃殺刑は覚悟せねばと重苦しさも漂っていた。

シベリア縦断九千キロ

十一月三日、ソ連軍将校から、日本兵はナホトカ港よりダモイ（帰国）し、正月には日本で楽しい正月を迎えられる……との情報が入り、歓喜のうちに牡丹江近くの掖河から、貨車を左右二段に区切った中に四十人が詰め込まれ、足と頭を交互にして寝る貨物列車で、混成部隊一、二〇〇人が、シベリア經由ナホトカ港へ向かって出発した。二昼夜経過して、ソ満国境を通過したと思われる頃より、列車は、見渡す限り白色に覆われたシベリアの大平原を西へ西へと走った。途中ハバロフスク、チタなどの都市を通過し、バイカル湖畔を一昼夜走り続け、古都イルクーツクに着いた。この貨車には、小窓が一つあるだけで、真ん中にお粗末なストープが据えてあり、外から鍵がかけられていた。用使は、一日に二、三回停車する小駅か信号所で、監視兵が外から鍵を外してくれると一斉に飛び下りて、一列横隊に線路のわきでやった。捕虜ならではの景観であった。イルクーツクで列車は半日停車し、機関車を取り替えた。

あのシベリアの大地の広さには、驚嘆するばかりであった。ノヴォシビルスク、オムスクと列車は大雪原をひた走り、ウラル山脈を越え、ヨーロッパの黒土地帯に入る。ボルガ河を渡り、十一月三十日、モスクワ東南のタンポフ市の郊外ラーダの森に着いた。満州を出発してから二十八日間の長い貨車輸送のため、心身共に疲労し、歩くのもやつとのことであった。途中、貨車の小窓から眺める駅々の風景には、独ソ戦による戦火の跡も生々しく灰色の人影が動いていた。そして、不思議と若い男の姿をあまり見かけず、老人や婦女子が多かった。また軍用のトラック、ジープを初め、食糧品の缶詰に至るまで「USA」の表示が目につき、米国援助の大きかったことを知らされた。やはり独ソ戦でソ連の犠牲がどんなに大きかったかが判ってきた。ソ連復興のため、我々を領土内に運び入れ、労働力欲しさに人質として強制労働に従事させる企図であった。

収容所の生活と強制労働

ラーダの森にある第一八八収容所は、独ソ戦でヒト

ラーダがモスクワを攻略する時、ソ連軍の陣地として造られたもので、白樺林の中に半地下式の土窟兵舎で、飛行機からも見えない巧みなものであった。ほとんど日光の入る窓もなく、至近距離でなければ顔の判別すら困難な程で、極めて不衛生な宿舎であった。丸太を組み合わせた兵舎の板の上に毛布一枚を敷き、身動きもできない程狭い寝室兼食堂であった。それに、着の身着のまま、外套を掛け、隣人と触れ合ってお互いの体温で生きていることを通じ合うといった環境であった。宿舎には電灯もなく、便所も屋外へ数十メートル出なければならぬ不便なもので、特に冬期間はその往復が難儀なことであった。

ソ連側では、発疹チフスの予防対策上、シラミの発生を防止することが衛生検査の最大眼目であったが、実際には三カ月に一回程度しか被服の乾燥消毒は実施されなかった。その際、桶一杯の湯と消しゴム程度の石鹼が支給された。乾燥室の隣の部屋にソ側の女医がいて、我々の尻の筋肉をつまみ、肉の付き具合で健康状態を診断していた。肉の少ない者は軽労働に回され

ることになるが、それも人数の制限があるらしく、いい加減な判定であった。女医の前で「ハラショー」と言いながら、ソ連の看護婦にわき毛や陰毛を剃り落とされたことも忘れられない。

食糧については、一日に黒パン三百グラム、それに朝、夕、カーシャという燕麦の粥か高粱の粥が、飯盒の蓋に七分程度、時には塩魚か豆類の少量入ったスープで、他に砂糖が水筒の栓一杯弱、岩塩少々であった。煙草は週に一回、マホルカという茎の多い木屑のような煙草が配給された。白樺で自作のパイプや、古新聞紙を切り、巻いて吸った。マッチがないので、石と金物を拾って火打ち石をつくり、綿に糸を巻いて火種を移して使用したものも思い出である。ソ側の要人が収容所を視察に来る時には、量が多く、少量のスープにも羊の肉等が入っていたから不思議であった。作業の都合で朝食が夜になり、昼食と夕食を深夜に一度にすることもあった。一日の作業を終わって帰ると空腹に襲われ、飢餓感をどうすることもできないほどで、寝つかれない夜や、また腹いっぱい餅を食べた夢を見

て目が覚めたこともあり、寒さと空腹で朝まで眠ることのできないようなことも何度かあった。

ソ連の酷寒は、鼻毛、まつ毛は勿論、身体も凍りつくような寒さで、寒いというより痛いという言葉が当てはまるかも知れない。連日零下三十度前後の極寒地で、劣悪な給与による飢え、毎日ノルマ、ノルマと追いまくられ、自由のきかない強制労働、電灯のない宿舍で、シラミと南京虫の発生に苦しめられる等、悪条件との闘いであった。若い我々の体力でさえ、一日一日目に見えて痩せ衰えていった。雪の中、丸太を運搬中、何回となく転ぶことがあった。作業の帰路、空腹に襲われ、雪にまみれた馬糞が丸く転がっていても、馬鈴薯ではないかと確かめたり、煉瓦のかけらが黒パンに見える錯覚に陥り、「何でもよい、腹いっぱい食べたい」と叫びたくなるが、その声も出ない。今、當時を思い出し身震いがする。

昭和二十一年の正月には、冬將軍と恐れられていた物凄い寒波の襲来で、春の雪解けまでに、栄養失調と発疹チフスでバタバタと死亡していった。その頃、隣

に寝ていた戦友（福岡県出身）が朝起きてこないの
で揺り起こしたら、過労と栄養失調のため枯木の如く死
んでいた。死体は隣組四人で板の上のせ、霊安所へ
運んだ。ソ連人が着衣は全部はぎ取り、越中フンドシ
一つの真ッ裸にして札を首に付けた。そして霊安所の
隣にある倉庫まで運ばせた。そこには、凍って硬直し
たマネキン人形のような死体が積まれ、春までそのま
ま放置されていたようであった。雪解けの頃、倉庫の
前に馬ソリの跡が深く残っていたのが印象的であっ
た。死ねば人間といえどもただの物体であるとの共産
党員の考え方は、冷酷、非人道的で、我々には納得が
できないものであった。ドイツの捕虜と作業場で一緒
になることがあったが、彼等は「この収容所の中で一
番先に倒れたのは、若くて身体が丈夫であっても、一
番正直に熱心に作業をやっていた人々であった。我々
生き残っている者は要領のよい者ばかりである。必ず
元気で帰国し、ドイツの再建のため頑張るのだ。日本
人も仕事は要領よくやれ……」と教えてくれた。

ロシア人は歌の好きな人種である。それも合唱であ

り、コルホーズ（集団農場）に向かう労働者が、トラ
ックの荷台の上で、大声を出し合唱して通り過ぎて行
くのによく出会った。春先から初夏の頃、連日農場作
業や道路建設作業が続いた。休憩時間を利用して、オ
オバコ、セリ、アカザ等の野草を摘み、飯盒に持ち帰
って、ラーゲル内の空地の片隅で煮上げ、夕食の足し
にした。調味料は僅かの岩塩であったが、それでも空
腹が満たされる菜しきは格別なものがあつた。ある
日、コルホーズの人参畑の除草作業で、監督の眼を盗
み人参を抜き取り、根についた黒土を脚絆ですり落と
し、むさぼり食べたが、歯ごたえ、舌にしみる甘さは
柿の味覚そのものに感じた。また拾った馬鈴薯を飯盒
で煮上げて満腹感を味わったことと、そのうまさは今
でも忘れられない。

抑留期間中一度も紙類の配給がなかったため、便所
用の紙に不自由をし、思わぬ苦勞でもあつた。作業へ
の往復の路上などで見つけた紙類は勿論、布切れ類一
切ごとごとく競って拾い集めた。その布切れは、水で
洗い乾かした上、小さく切って使用したし、夏季には

草木類の葉も代用とした。物質が豊富で、恵まれていて現代の生活では想像もできない語り草である。

昭和二十一年七月下旬、ラーダ収容所を出発し、五日間の旅で、キズネルという田舎の小駅に着いた。それから三日間約一〇〇キロを行軍し、エラブカに着いた。ボルガ河の支流ガマ河のほとりにある町で、帝政ロシア時代の囚人の絞首刑場跡と聞いた。ここは、タール自治共和国カザン地区第九七収容所であった。日本人の将校数千人が抑留されており、AとB、二つのグループに分かれていた。私はBラーゲルに抑留された。古い赤煉瓦で三階建の建物であった。ここで、ドイツ兵を射殺した場所だという銃弾の穴が数多く煉瓦塀に生々しく残っていた。この収容所での主な作業は森林伐採、コルホーズの農場作業、筏組み等であった。ここを基地として、ボルショイボル、ボンジュウガ、クゼルタウン、カザン等の奥地へ数百人単位で作業に派遣され、数カ月滞在して働いた。

この収容所は将校のみであったため、何かにつけ封建的な階級意識が残っており、かつての階級を笠に着

て、若い将校に何かと押し付けようとする者が少なくなかった。そこで、苦しい、つらい仕事の割り当ては班長がくじで決定することにした。しかし、何か明るさに欠けた重苦しい空気が漂っていた。その上、我々の行動を監視するソ連政治部員が常に目を光らせていて、反ソ的な言論や行動をする者がいれば直ちに連行し、奥地の収容所へ転属を命じた。クロイツェルという女性の政治部中尉が、日本人よりも上手な日本語でラーゲリを切り回し、一般日本人には好意を持っていたが、彼女の狙った特務機関員、憲兵、警察官、情報関係者等は、決して見逃すことはなかった。彼女が張り巡らした情報網を駆使して、片っ端から釣り上げていくのであった。

その頃、『日本新聞（ハバロフスク発行の抑留日本人向け思想教育新聞）』の啓蒙による民主化運動が盛り上がっていた。即ち、天皇制の打倒、財閥や地主らの搾取の実態、軍閥に対する批判、そして共産主義国（ソ同盟）の称賛、民族解放等……についてのオルグが各棟で行なわれ、共産主義の洗脳教育であった。あ

る日、掲示板に張られていた『日本新聞』に、日本の国体の悪口を書いた記事について批判めいた話をした若い大尉（陸士出身）が、朝の点呼の時ソ連側に連行されたことがあった。この連行を機に皆が恐怖感を抱き、見ざる、聞かざる、言わざる主義で、何事も要領よく、御身大切にであった。全員が無事日本へ帰ることの義務がある。今ここで犬死にしては……といった雰囲気が漂っていた。

また、その頃、収容所では、何千人という者の糞尿の処理とそれを専門で運搬する作業のことが話題となつて、何とか解決しなければと奔走し、特掃班（班長北村土守少佐・広島県福山市出身）を結成の上、ソ連側に申し出た。私もその仲間に入った。ところが、ソ連側は大変に好意的で、何かにつけ配慮してくれた。部屋も一般の者とは別で、食事も増配があり、監視も比較的緩和されたため、解放された気分の日々を送ることができた。しかし、糞尿の処理は大変な仕事であった。極寒になると糞尿が重なりコンクリートより硬く、山になってくる。それを切り崩すには、渾身の力

を振るい鶴はしや鉄棒でこじらねばならず、岩を切り崩す感じであった。幸い、寒いので臭いはほとんどなかったが、室内に入る前には衣類を払い、靴を点検しておかねば、室内の温度で溶けると大変であった。夏は荷車、冬はソリで、収容所から約三キロ先のガマ河堤防近くに、一日三往復（十人一組）がノルマであった。人から敬遠された仕事で、特に冬期間は重労働であっただけに、収容所長は「ハラシヨラポーター（優良労働者）」と言ってくれ、将校梯団ダモイの第一順位に決定したと聞かされ、その苦勞が報いられたと班員一同喜んだものであった。

二年目の越冬は、万事が要領よく、仕事も慣れてきていたが、酷寒の影響で持病に苦しみ悩む日が続いた。また着たぎりの衣類は綻び、日用品の不足等身のまわりは次第に心細く、不安が募っていた。

昭和二十二年五月一日のメーデー前後から、日本の捕虜や居留民は前年の暮れまでにはほとんど内地へ送還されており、現在、ナホトカの港には日本の輸送船が待機しているといった朗報に、部屋中歓喜に満ちた。

しかし、情報は何回となく流れては消え、流れてはまた消えの繰り返しであった。九月下旬、国際赤十字社の斡旋により、俘虜用往復葉書（スイス経由）の返書を受け取ることができた。葉書を手にした瞬間、私はそれが父の筆跡であることを知り、胸が激しく動揺した。昭和二十年六月き号演習に派遣されて以降、全く通信が途絶えて既に二年余の歳月が流れていた。その間、我が国は未曾有の大変動に遭遇していたため、「故郷は、家族は」と日夜不安を抱いていただけに、その喜びは大きかった。幸い家族は無事との知らせに、まず安堵の胸を撫でおろしたものの、無性に里心がつき、ダモイの夢に明け暮れた。

昭和二十二年十月に入ると、いよいよ待望の帰国となった。我々の移動命令は予告なしに唐突に出されるのが通例であった。その命令を発するソ連将校すら何ら知ることもなく極秘に扱われていたのは、ソ連の国情を如実に示しているように思われた。「ヤボンスキー・サルダート、ダモイ！　ダモイ！」とソ連将兵の連呼で、我々は急ぎよ身支度をさせられ、この収容所

の第一梯団として十月六日、エラブカを出発した。二
十数日の長い旅でナホトカ港へ到着した。

これで、やっと夢に見た母国日本へ帰れると思いきや、一難去ってまた一難であった。そこには、ソ連側と連絡を密にしている民主グループの団体（赤い民主化に洗脳された日本の若者）が待ち構えており、「ソ連の民主教育に徹している者でなければ帰国させないことになっている」と、おどかさながら帰国の順番を待った。ソ連人ならともかく、日本人同士でありながら、あんな仕打ちを受けようとは夢にも思わなかった。彼等は、「赤旗」や「インターナショナルの歌」を歌わせながら、共産主義の詰め込み教育を行った。彼等の話の区切りには一々返事をさせられ、返事が小さいと大きな声で怒られた。仕方なく大きな声で返事をし、何とか誤魔化して、やっとのことで復員船栄豊丸（六、五〇〇トン）に乗船することができた。

我々は、兵隊というより乞食の姿であり、髪や髭は伸び、ボロ毛布を肩に掛け、食器用の空缶を腰に下げ、栄養失調で骨皮になった力なき群像は、哀れとし

か言いよのないものであった。復員船のタラップを上る時は夢中であったが、何年ぶりかで味わる感激のひとつときであった。それは、今から我々を監視する者は誰もなく、身も心もゆったりと過ごせる喜びでもあった。船は三日間日本海を走り、十一月七日無事函館港に入港した。湾内で一夜が明けて、久しぶりに故国の緑なす島や山々の景色を目の前にした時、「ああ、日本は美しい」と帰国の実感が初めて湧いてきた、あの感激はいまだに忘れることはない。消毒、検疫等を済ませ、十一月十二日、渡満してから五年ぶりに日本の土を踏むことができた。

エラブカ収容所では、我々の第一梯団が帰国してから昭和二十五年までに、約八五%の者が帰国した。残留者は、現役将校のたいぶん、特務機関、憲兵、警察、機動兵団、睨まれていた反動者等であった。彼等は、戦犯またはその容疑者として、八年から十一年の長い間、監獄生活を送り、強制労働に従事させられた。

私の所属していた関東軍直轄機動旅団は、その任務

の特異性（敵陣へ挺身斬り込み、重要な施設の破壊等）によりソ連当局が謀略部隊であると決定づけ、その集団の将校はほとんど長期残留者の中に入れていた。私は、全く運のよかった者だと思ひ感謝せずにはいられないと同時に、他の者に済まない気持ちでもあった。ソ連からの引揚げで、奥地から将校が復員するのは我々が第一陣であった。巷では、共産主義に洗脳された親ソ的な若い将校を赤旗の先頭に立たせ、日本の民主化を狙う企画で帰国させているといった噂も流されており、占領軍司令部（GHQ）としては非常に関心を持っていた。抽出された者は、東京日比谷の星条旗が翻るGHQに連行を命ぜられ、そこで抑留中のソ連での実態、特に教育をはじめ数十項目の調査事項について、二世の米軍将校が流暢な日本語で聞き取りを行った。心配していたが、好意的な歓待ぶり、タバコやチョコレートもくれた。廃墟から復興の兆しが見えている東京の街には、横文字の標識や看板が増え、MPがあざやかな手さばきで交通整理をしていた情景が記憶に残っている。また、女性の服装が派

手になっているのが目につき驚いた。

十一月二十三日夕方、懐かしい鳥取へ着いた。

駅のホームには、父と二、三人の近親者が迎えに出てくれた。五年ぶりに会う父の姿には、思いの外、老いの影が漂っていたが、それは敗戦による大きな社会変動によるところが大きいように感じられた。

忘れまい 引揚兵士の あの姿

吹雪く夜の飢えと寒さにシベリアは

消え行く戦友(とも)の 声ぞ無情な

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十年六月二十日

学歴 昭和十八年九月 明治大学政経学部繰上卒業

業

入隊 昭和十八年十一月一日 中部第四十七部隊

(鳥取)

十一月十七日 歩兵第六十三連

隊(満州三江省興山鎮)に転属

昭和十九年三月十日 甲種幹部候補生に採

用

十二月十五日 関東軍幹部教育

隊を卒業(間島)

十二月十六日 関東軍直轄機動

旅団第二連隊(吉林)に転属

終戦時の階級 陸軍歩兵少尉

武装解除 昭和二十年九月七日

入ソ日時 昭和二十年十一月三日

復員 昭和二十二年十一月十二日(函館)

復員後の職業 昭和二十三年三月一日、鳥取県職員に

採用

昭和五十四年六月一日、鳥取県議会事

務局長を最後に退職

その後、船岡町教育委員長、老人クラブ連合会長等に

就任

叙勲 平成四年四月 勲四等瑞宝章受章

(鳥取県 松下 盛一)